

毎月一日発行
発行所
宗 像 大 社
宗 像 会
福岡県宗像郡玄海町
電話 玄海代② 1311
年送一価定料共 500円

九州店
福岡市吉塚一丁目三五番二号(〒八三三)
電話福岡(〇五二)六五一九四五六番
京都市下京区油小路六条北入(Tokyo)
電話京都(〇四三)三三三三(代)三番

若布献上と海洋神幸を焦点に――

昭和八年度海洋神事費
出向八年度海洋神事費
會同會が、二月廿午前十一時
より当社館に於て開催せり。
同会は沖宮宮奉賛長河野大木
氏を始め、郡内七浦の紛組長、
救難所當番十五より出席、
つが定時時には食が持越參
つて了る。是は寒風烈、惡天候
を擧げて敬祈願祭を祈し、玉
串を捧げ大漁を祈願した。
幸と敬告の案に集点をば、
り協議ははり、活発な意見の交
換が行われり。
撤若者の件では三月十日に
學堂へ献する。上京者は例通
り宮司、隨員一名、組代表名
を代表、組代表名を代表、組
として先議した。
又奉奏会は四月二、三日とし
関係者各位協力願ひ、出席者
の名當日出席者次の通りで
の全面協同を得た。

	(敬称略)同
鐘崎組	組員 七田三石・門 参事 池園廣
大島	組員 古川俊枝 参事 佐藤千里
勝浦	組員 天田経広 参事 花野力
神湊	組員 中吉助 参事 谷口福良
地島	組員 深田力松 参事 後藤亮祐

—交通指導も行わる—



いよ急ぎでまゐり。同時に子供を持つおうさんやおかあさん方も充分子供動向に注意を身身の安全に務めていたさういふ。

(*)

写真向う側は交通係のお姉さんが二個人をあやつり、ユモアをまき、手前指振振り、手前熱心に聴き入っている園児とおかあさん達。

(*)

四人のお姉さんたちが形をあらわして幼稚園に対して福岡県警より特別に派遣された交通視員（中西澄子、佐藤三喜子、木村ひとみ、吉開照子）のお姉さんたちにより交通指導が行われ、

点検の信号機を参して断然の渡り方の練習を實際に行なわれ、園児が交通事故を顧みない姿がりと窺われた。

のてとに、
天國は近かり、故に改めよ。
の効きめは薄い。○抽象的な平和
と論議で所居と明證を乞ふことし
ても、それは普通の人の粉飾衣紋に
過ぎない。世界は聴いて、も感服も
なく、政治的外交的的影響も乏し
い。わが國株式市場等その真意
を悟り具體化して、世論がちよ
つぱり動かし、○神々の孫翁が
住む東部の列島は、今公書と福祉
に論議が盛ん。九州、路った山
紫木山、ヘドや P C B 汚染
で神経質なれば、居られぬ食
物もなくな仕末。清潔の民を詩
歌に美化した列島民族も、エコノ
ミクス・ア・ニールと蔑視されて
は、江口・子は背越の金は使わ
ぬなど夢想の漫闊。経費優先と自
然破壊の疾風は神々の魂までも森
吹か荒ししゆく。○列島國を發奮
してはならない。國土は憂容
かく。○

くまのこぞを驚かす きまひて春の競渡の匂ひ	曲	天野トモエ
旧正月高島神社の祭へ神酒を みつゝ更鼓をうたふ	田中	小方 実
アメリカも北ベトナムもたたいの 勝利おびつ和平ならし	勝浦	永島 文子
睡みつつ誘はる皮染れそれの個 性の味にじむ葉さ	津屋崎	菱花 女
勤勞の働きかちめて力のかぎ り余生さなむ	原町	八波 五月
ひたすに身重の嫁をじつづれ 所祈所に船と名を書く	大井	吉田ますみ
五辻面つてかね々終極路をい そそそ奪せよ来る	光岡	河村 久光
国会の光放散閉閣にも春なり ゆくの意致あけべり	福岡	井原素比古
上る朝の四つ葉は 對馬見舞日に立　雲霞日にて雨	宮田	片山 朔子
終日をうしろしたる寒の雨夜の 庭戸に星花散らして	津屋崎	占部 由久
暖冬にほろ咲き御倉の花がほり すゞし登しのびまる	熊林	岡部 緑陽
焚きごの蔭を傘に熱気ちつを 大口開けて燦は笑いを	武丸	立石ろせ乃
銀杏の莢葉満をつめて静まれる 野の霜に早朝の道ゆく	幸像	中村 幸
小さき手にかざし紅葉のくれな ゐが陽透きて幼児白ゆしみに	吉留	白木うめ乃
梅にきてなき鳥鳴官しかげ満 開の花つき散ぢやせり	福岡	入江 柳江
寒椿一つの花を破璃鏡にて染めか えしコトも曾せてうけりけり	東京	花田文五郎

春まつり御案内

記

三月三十一日(土)	午後五時	高宮祭
四月一日	午後六時	総社宵祭
四月二日	午前十二時	大祭
(月)	午前十一時	大祭
四月二日	午前十一時	大祭
四月二日	午前十一時	大祭

四月二日 午前九時より剣道大会が行なわれます。

四月二日 午前十一時より宗廟國神大祭が肅行されます。

またこれによつて豆撒行事が行われ、豆を拾う幼園児の面が、駐車場にたまりました。

やうい腹鼓術功の指導を藤井氏、園児は勿論、父や先生も感懐を感ずり、熱心に聴き入っていました。

阿蒙少言

大統領就任の光景が、海の彼方から電波にのって放散された。防弾盾に囲まれて平和が強調されたが、民衆は怒濤を捲て妨害を続けた。機嫌が悪いと、電波を遮断する。機嫌が悪いと、電波を遮断する。

第三回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日切 詠草到着順

福岡 桜井 ツ子	宮田 片山 一
幼子に起つてあそぶ静き糸を しほに引きつてあそぶ静き糸を	除夜の鐘きつつ妻三人をり の一年を然と終る
田久 立花 勇雄	福岡 吉田 信夫
新しき職も馴れて吾はつとめ はげみて日々を足る	脚套るの衣を抱きて雪里呼る若 き学生の面がけ
徳重 松原やすみ	津屋崎 美野 時雄
大寒の入りとは云ふ日得にす れたんば既に咲きあそぶ	街角に見ると富地の山肌は冬陽 に映へ枯草の色

浪人詩には眞がある。一山を抜く刀折れて松雪」は、赤穂浪士の太田順吉の辭世。彼は元祿の有名人俳諧師と交際がたな。浪人の身を大事執行の意味、筆先につけた子葉が、橋や其角との直前直前に、小説劇乃至義士列伝のエピソードの一と伝えられてゐる寫眞の程は知らない。年の瀬や水の流と入るのは」と其角が呼びかけた宛句に「あした待たぬ」とその重箱と子葉が結んでいる。

主君前絶、袂を離れ人間性は高められ美しう時が明く、素浪人は詩人である。虚構を脱して実が遇り、苦難多き生活の中に強い詩心らしいものが溢れ、苦難多き生活の中は達ちなり。大学を出たり成績が優れかつ、世のため人のためになるものは限らない。不本意境地にある者、それ以前の生活を煩わしめる雑念に追われぬ中に、時にふれ心の奥に詩趣を感じてゐた。

それ動いて時に裏切られると、放浪記の林美子となり、雲は天才あるの石塚啄木となつたのであらうが、詩歌表現する才能を持たなかつた浪人からは、発達の機会を得なかつたことも否めない。

浪人野人の境地に生む心情は、古今東西変わりはない。野武、郷土といへば、乱風の戦国時代律に縁なく命運の主まには田夫野人の生活に落ちついた。中には風景も豊臣秀吉とかかり奇縁から、国の領主を咲いた蜂須小六さがあつた、こうなる野武士、出原朗

人情
然
粉飾
文
美人
中
に
る。
云
情
一系
で

[illegible]

たてなぐさ浪合へ
生るべき浪合へ
女々不遇所産である
はなにもある

菅原道高も、都を退
く旅人であつたが、終生地位に低
下し居る浪人の心持で、
浪人へはあるまい。

その歌詠は花の
香の感懐であつた。
「一は、一茶の有如な
もの」から跳ぬ作つといふ
位の開解が客では、
詩詠はづれ衣血

空をちきり掲げ精神の
東洋文化の歴史は
点に、悦楽と悲率
なる。大陸から伝来し
殖したのが國は、良

き文化の芽を伝へきた。鶯鷗の中に生
たる人の説は、道徳信仰を底としたものであ
らうくないのである。

物質文明を強調してきた欧米の文化は、今
行き詰まりになつた指摘される。同時に排他
思想を含んだ歐米文化の模倣も、転換期に達し
たと云われる。識者が古来の日本の秀れたこ
れる民衆的所を見直すか、強い反省をする
ている。現に外人資本主義道義修め、日本
良美善さを磨き習ふぞえそよ。手日本
自身脚を一應に踏んければならぬ。當量
い境過には遙かに遠い史・藝世代の代表の
不遇困窮の生活の中苦惱して、莫念を吐
した詩文や貴重書庫と味わつのも、日本人
を知る一助となつた。

× × ×

れど、恋愛結婚にまつた物語に、
もく出る意圖、形とあらにあらぬ
ものはない。姿形こそ正である
や。老化し、頭の髪は落して、
開発の年を過ぎてカサマを失つ
て、正常なありと云ふことなく
なる。○緒大衆となつても、そ
れは敗北の先遣ではなく、道義を
忘れたエゴミック・ニマルが、
如何に金づくりに巧みでテクニッ
クの代替になつたにしろ。列國
改造は手深くい反響が出来るべ
きである。○尊にのけ目を感じる
となどは、そこに精神の貧しさ
がある。にわか成金やばり吹き政
治家の自語に耳を傾けるより、
浪人の詩を誦わいた。

(白雲)

<p>祖の名連つて寺の水鉢落葉集 めて水澄みたる</p> <p>武丸 原田 リノ</p>	<p>送り來る娘の写真貼りながら昔に 似し顔にため息をつく</p> <p>戸 畑 田中ハツセ</p>	<p>残照を待つて明るき湯つぽ中冷た き水滴に落ち来る</p> <p>宮田 北原 君子</p>	<p>高原は湧きつづまて薄氷の池に 寄る馬りつつ立つ</p> <p>戸 畑 藤井 孝子</p>	<p>降る雨洩きし山茶庭の面に散り りし花お紅く艶めく</p> <p>吉武 早川 須磨</p>	<p>生命力に書き芽を出し</p> <p>田 熊 鷺津かつ子</p>
<p>年意氣盛くなり</p> <p>田 島 伊藤 京子</p>	<p>夜ひと夜降りたる雨と境内の白梅 の花はよも蘭のつゝ</p> <p>田 島 吉武 武雄</p>	<p>取りし日の面影照映今日はまだ君 のみまに涙し語りぬ</p> <p>名 残 竹原 圓</p>	<p>散る程はまた咲いていぬ白梅を見 ながら猿と争ふ短枝</p> <p>戸 畑 藤井 孝子</p>	<p>霧靈に妨つられを月や潮れ出る 光輝く輝き</p> <p>久留米 藤田太郎坊</p>	<p>風のまじりていふ実をのそがす る青木に揺れる重なりしかり</p> <p>東 郷 藤島 辰子</p>

